

アルタイ山脈におけるヌトック（里）の崇拜—モンゴル国西部アルタイ山地のトルグート集団における調査から—

Worship of *Nutug* in Altai Mountains—Checkin Research in *Torgud* Community in Altai Mountains of Western Mongolia—

斯 琴
SIQIN

要旨 本稿では2008年8月21～9月20日まで行われたモンゴル国アルタイ山脈地域における現地調査を踏まえてモンゴル系トルグート集団の生活実情から現地の人々と自然との精神的なつながりを考察した。すなわち、集団つまり人間の移動によって居場所が変わり、随時たどり着いた土地をヌトック（里）と見なすことは遊牧の精神である。遊牧において人間と自然の出会いは常に新しくかつ密接である。そのため、「ヌトック」の移動は、「牧民」の移動でもあり、「里」が変わることでもある。両方を意味することは可能であって、アルタイ山脈地域のモンゴル系トルグート集団では「ヌトック」という語に「人間」と「自然」の意味が集約されている。

1. アルタイ山脈におけるトルグート集団

モンゴル国で、ハンガイとヘンディ山地をめぐる中央部と東部に主にモンゴル系ハルハ集団が生活を営んでおるに比して、西部におけるアルタイ山脈は豊かな牧草地を展開して最も多種の民族や集団の揺りかごになっている。この地方でアルタイ山脈に生きるモンゴル系諸集団の生活実情を見ることができる。特にモンゴル国西部¹⁾における中心とされるホブト・アイマクはアルタイ山脈を跨り、その山間と南北山麓に諸集団の牧民は牧畜生業を営んでいる。このなかでトルグート集団が集中する唯一の地域はアルタイ山脈の南麓のブルガン・ソムである。

筆者は2008年8月21～9月20日までブルガン・ソムで現地調査を行い、トルグート集団の自然環境や生活実情を踏まえて現地の人々は自然とどのような精神的なつながりをもっているのかを考察した。本稿では、現地調査で目の当たりにした実情を取り挙げながらトルグート人のヌトック（里）への信仰について分析したい。

ブルガン・ソムは万年雪山のムンヘ・ハイラハンを障壁に北麓にあるホブト・アイマク中心地より380km、首都のウランバートルより1,855km離れる。ブルガン・ソムの名称はブルガン川に由来する。ブルガン川の下流はブルガン・ソム内を貫流するからである。ブルガン・ソムの人口は1万人弱であり、そのなかでトルグート人は80%を占め、その

¹⁾ モンゴルの西部というのは、ここでモンゴル国の最も西端に位置するバインウルゲイ、ホブド、ウブスといった三つのアイマク（日本の県に当たる行政区分）を指すことにする。モンゴル国では、いくつかの地帯区分があり、その目的によって多少ずれがある。ただし、西部という区分には上記の三つのアイマクは必ず含まれる。

ほかハルハ、ザハチン、ウリヤンハイ、カザフなどの、幾つかの集団が含まれている。ブルガン・ソムのトルグートは18世紀末ホブド参贊大臣に管轄されたトルグートの二つの旗に起源する。言い換えれば、これらのトルグート人はジュンガル帝国の滅亡後、清朝によってアルタイ山南側、ウルング河東側に移住させられたトルグート人の後裔である。

ブルガン・ソムの下位行政単位に5つのバグが置かれ、それぞれアラグ・トロゴイ、バヤン・ゴル、バヤン・スダル、バイタグ、ダラト、プリン・ハイラハンという。そして、これらのバグは主に昔から習慣的に利用されてきた牧草地に基づいて設けられた。地元の人々によれば、アラグ・トロゴイはバンギン・トルグートの、バヤン・ゴルはホシュト・トルグートの、バヤン・スダルはカザフの、バイタグはベーリン・トルグートとホブグサイリン・トルグートの、ダラトとプリン・ハイラハンは中心部に位置し、ベーリン・トルグートとバンギン・トルグートの、牧草地であるという。カザフを除けば、バンギン、ベーリン、ホシュト、ホブグサイリンという集団名が登場し、トルグートの下位集団に思われる。ところで、ホシュトとは、歴史上四オイラト連盟のメンバーに登場する集団名であるが、ホブグサイリンとは、現在の中国新疆自治区内に位置し、昔からトルグート人の故郷である、ホブグサイリという地名に因む。そうすると、ホシュトとホブグサイリの両者がブルガン・ソムのトルグート集団とどのような関わりがあるか、そしてバンギンとベーリンとどのような関係にあるか、といった疑問が浮かび上がる。

筆者は現地では出会った人々は自分の所属をこのように言う。バースト（男性、70歳）は自分のことをベーリン・トルグートのバイタン・オボグ（氏）の人間といい、彼の妻は自分をホシュト・トルグートのハターマド氏の人間という。そして、バダマラ（男性、67歳）はバンギン・トルグートのヨクス・オボグの、彼の妻は同一集団のハルハマド・オボグの所属である。ブヤンダライ（男性、68歳）はベーリン・トルグートの人間である。ラムジャブ（女性、68歳）はバンギン・トルグートのハサグード・オボグの、ジーサン（女性、80歳）はバンギン・トルグートのヨクス・オボグの、スヘ（女性、78歳）はホシュト・トルグートのソムチン・オボグの、所属である。また、同名の二人のウニル（女性、83歳と86歳）はホブグサイリン・トルグートで、二人のブーベ（女性、両者ともに84歳）はホブグサイリのボイルス・オボグの所属である。現地の人々は、何よりこうした自分の所属をはっきりさせている。

「バンギン」という語は「バンガハン」とも発音され、両者ともに「ワンギン」という濁りのある発音に由来することが、現地の人々の話から伺われる。「ワンギン」とは、「ワン（王）」と「ギン（の）」の組み合わせで「王の」を意味する。つまり、バンギン・トルグートとは、「王」のトルグートという意味である。これと同じように、ベーリン・トルグートとは「ベーリ」のトルグートである。現地での言い伝えによれば、バンギン・トルグートとベーリン・トルグートのノヤン（殿）は兄弟であって、それぞれ「王」と「ベーリ」の爵位を与えられたため、両者の下に置かれる民は各々バンギン・トルグート、ベーリン・トルグートと呼ばれた。兄弟のノヤンについて次のような伝承が伝えられている。

トルグート人には二人兄弟のノヤン（殿）がいた。兄の方はもじゃもじゃのひげをもった、落ち着いた立派な人で、弟の方はずるい人だった。この兄弟二人は清朝皇帝に派遣された使者に謁見することになった。皇帝の使者は二人を引見して兄の方をじっと

見た。使者を見送った後、兄はこのことが気になって仕方なく、弟に聞いた。「先ほど使者は私の方をじっと見ていたがどうしたか。何かあったか」と。すると、弟はこう答えた。「知らない。多分、兄上のひげが嫌われたのではないか」と。兄はなるほどと思い、ひげをきれいに剃ることにした。翌日、使者は再び兄弟を引見し、爵位を与えることになった。使者は立派なひげのある兄の方を気に入っていたが、再び会ったときひげがなくなり、その跡が真っ白で、二つの色の顔をした醜い姿だったので、がっかりした。それで、使者は王の爵位を弟に与え、兄に「ベーリ」の位を与えたという〔バースト、ブヤンダライらによる伝承〕。

この伝承に照らして考えるなら、「バンギン」と「ベーリン」という語は清朝封爵制度による「ワン」と「ベーリ」という爵位に起源する名称で、この2つのトルグート集団は親縁関係にある。史書に鑑みると、ジュンガル帝国の滅亡後移住された2つのトルグート・ソムはセレンとシャラ・フーヘンに率いられた集団であって、二人のノヤンは親族であったという史実に一致する〔Bürgüd 2000 : 371〕。

スヘという、78歳の女性はホシュトの貴族の子孫である。彼女は母に聞いたホシュトの話をごく語ってくれた。

我々のホシュトはイジリ川（ヴォルガ川）のホシュトだ。イジリ川にいたときホシュトは信仰する神を持っていなかった。ママタンという英雄がいて、透視者はママタンを大黒天と見ていた。こうしてホシュトはママタンを崇拜した。ホシュトの人口が20万に達したとき、ママタンは亡くなった。ママタンは片手を天に指し伸び、片手で大地を抑え、片目で天を、片目で地を見て亡くなった。周囲の人々はこの姿の意味を分からず不吉なことと思い、無理に手をおろして目を閉じさせたので、ママタンは悔やみつつ息を引き取った。後に透視者はママタンのことを解明した。ママタンの姿は上から襲う敵がないように、下の敵を抑えて、ホシュトを散らさないように見守るという意味だった。その姿がそのまま守られなかったため、20万のホシュトは分散した。それから、ホシュトは「ママタン」を神聖視して崇拜するようになった。

ママタンの夫人にツェンという人がいた。ツェン夫人はブルガン川に住むトルグートのノヤンであるシャラ・フーヘンの妹だった。ママタンがなくなってからツェン夫人は70人のホシュトを連れて、ブルガン川の実家を頼って来た。ツェン夫人は懐妊しており、後に男の子が生まれた。そのため、ツェン夫人は知恵をめぐらせ、ホプトのアンバン²⁾に領地とザサグ³⁾印をもらってホシュト・ソムを創建した。

スヘの話どおりなら、ブルガン・ソムのホシュトはトルグートの下位集団でなく、ホシュトに嫁いだ、トルグートの嫁が、一部のホシュトをつれて実家を頼ってきたことに起源する集団と理解できよう。言い換えれば、トルグート人の女性に率いられた、ホシュト集団はトルグート集団と隣り合って暮らしたのだ。18世紀末、トルグート・ソムと一緒にホシュ

²⁾ 地域の長官。

³⁾ 地域政権。

トの一つのソムがアルタイの東南側に移住させる政策を取られた一方、新しい土地に転入した集団の間に、このような親縁関係があったことがここに伝えられている。また、この一部のホシュトのリーダーがトルグート人の女性であったため、集団の混在によってホシュトは多数派のトルグート集団に所属する立場に置かれ、その結果ホシュト・トルグートと呼ばれることになったと思われる。

ホブグサイリ・トルグートが、はじめて自発的にブルガン川流域に移ってきたのは1935年あたりのことだったと、ドマ（73歳）という年配の女性は言う。彼女の親戚に当たるチェッテケというホブグサイリ出身の男性が、モンゴル国の革命のために活躍し、後に家族の5戸を故郷からモンゴル国へ移動させたことが、その例である。ウニル、ブーベらの経験談によれば、彼女らは1944～1945年にかけて家族と一緒に自発的に現在の中国新疆自治区のホブグサイリ地方からブルガン川流域に移ってきたという。転入以前、ホブグサイリン・トルグートの故地に14のソムが構成され、それぞれウンギン（王の）旗に4ソム、ホイト・ザサグに4ソム、そしてソロンなどの異集団によって構成された別のザサグに6つのソムが置かれたと、ブーベはいう。ブーベとドマの一族はウンギン旗に所属していたそうである。彼女らによれば、トルグート人はノヤンが亡くなって、カザフ人の強盗、中国の徴兵に苦しめられたばかりか、過酷な疫病のため移転しはじめ 数回に分けて、ブルガン川流域にたどり着いたという。ホブグサイリの故郷でトルグート人は、よりたくさんの家畜を飼って豊かに暮らしていたと伝えられている。ブーベの家で1,000～3,000頭の羊と山羊、そしてたくさんのラクダ、牛、馬を飼い、カザフ人を雇っていたという。ウニル②（人名がダブルする場合名前の後ろに①または②をつけて区別する）の家で1,000頭以上の羊と山羊、300～400頭の牛、50～60匹の馬を有し、カザフ人を使っていたそうである。ドマの家も馬とラクダは200～300頭に達し、カザフ人の使用人がいたという。こうした生活もカザフ人の強盗や漢人の徴兵にさらされて、余儀なく故郷を後にした。ウニル②によれば、カザフ人が襲ってきたとき、銃剣でドアのフェルトを捲り上げてゲルに入り込み、家の人を全部追い出してほしいものをすべて奪っていき、家畜の群れの真ん中に長い紐を投げて、家畜が散らばって逃げると半分を強奪して去ったという。こうしてトルグート人は、ノヤンの喪失に伴い、平和な生活も維持できなくなった。そのとき、モンゴル国で革命が勝利し、ホブグサイリにグループという組織を派遣した。ドマの一族は、グループの案内のもとで移動を達成した。経験談による転入の戸数や家畜数などの状況は、次の表1のようになる。

表1 ホブグサイリから移入したトルグート人の状況

| 人名 | 転入の年 | ホブグサイリでの転出地 | 戸数 | 家畜頭数（各戸） |
|---------------|------|-------------|--------|-------------------------------|
| ドマ (73歳) | 9歳 | デルン山 | 20～30戸 | 200～300匹の馬、200～300頭のラクダ |
| ウニル① (83歳) | 19歳 | デルン山 | 15戸 | 620頭の羊と山羊、70匹の馬、60頭のラクダ、47頭の牛 |

| | | | | |
|---------------|-----|-------------|--------|---|
| ウニル② (86歳) | 22歳 | ハブチグ・サラ、ズスン | 20~30戸 | 20~30頭の羊と山羊、 7~8匹の馬、20頭の牛、 たくさんのラクダ |
| ブーベ (84歳) | 20歳 | デルン山、サイル山 | 30数戸 | 700~800頭の羊と山羊、 100匹の馬、70頭のラクダ、 70~80頭の牛 |

表1で示したように、1944年にホブグサイリ・トルグートは家畜を追って、ブルガン川流域に移住した。しかし、その年、雪嵐に遭って大多数の家畜を失ったと、上記の経験者たちは語っている。ホブグサイリ・トルグートがブルガン川に移ったとき、この地域にバンギンとベーリンのトルグートが住んでおり、互いに平和に暮らしたという。

したがって、ブルガン・ソムのモンゴル系集団は主にバンギン、ベーリン、ホシュト、ホブグサイリといった4つに分かれている。また、上記の人々の所属から見れば、4つの集団の下位に、さらにいくつかのオボグが置かれることが分かる。たとえば、バンギン・トルグートにヨクス、ハサグード、ハラハマドなど、ベーリン・トルグートにバイタン、ホシュトにソムチン、ホブグサイリにボイルス、といったオボグが見られる。オボグはともかく、バンギン、ベーリン、ホシュト、ホブグサイリという4つの集団は、バグの行政区分でヌトックを与えられて集住している。バンギン、ベーリン、ホシュトはそれぞれ習慣的に認められた、遊牧するヌトックをもち、そのシンボルとしてダシワンジル山、ブリン・ハイラハン山、バヤン・ゴル川にオボーが祭られている。

2. トルグート集団の生活のありよう

(1) 中心地の生活のありよう

ブリン・ハイラハン山の麓にブルガン・ソムの政治、経済、医療などを中心とする役所の所在地が設けられ、現地でこれを「ソム・イン・トブ」（以下この町を「ソムの中心地」と呼ぶことにする）という。つまり、この町は「ソムの中心」と呼ばれている。ブルガン川はブリン・ハイラハン山の西側を流れている。ソムの中心地は川ぞいに伸びた小さな町であり、現地の人は川上のほうを「テーレ（上）」と、川下のほうを「ドーラ（下）」という。ブリン・ハイラハン山を中心とすれば、山の東側に役所の所在地が置かれ、川の東岸に建物が立ち並んでいる。

町の中心部は川上に位置し、並行した二つの街をもつ。一つはトブ・グドムジと呼ばれる市場であり、もう一つはホイト・グドムジという市役所、銀行、旅館を中心した街である。トブ・グドムジは中心街を、ホイト・グドムジは北街を意味する。市場は大体500~800mの長さ、50~100mの広さの空間を囲んで集中し、薬屋、床屋、飲食店、雑貨店、アイスクリーム店といった様々な店が並んでいる。その中で、雑貨店や飲食店は80軒を数える。これらの建物は土れんがでできた小屋で、そこに新しい土れんがの家を建ててい

る、モンゴル人夫婦もいる。

雑貨店は洋服や靴や日用商品と一緒に扱っている。商品のなかでパンやワッフルやトイレットペーパーなどはモンゴル製のもののほか、ロシア製のものにクッキー、一個売りのチョコレート、調味料、韓国製のものにインスタントラーメンなどがある。洋服、靴、靴下、髪どめ、タオル、石鹸などはほとんど中国製のものである。また、干しうどんや小麦粉や米もほとんど中国から輸入したものだが、野菜や果物は少ないながら、現地栽培のものが売られている。小売店のカウンターにたまに肉も置いてある。人に頼まれて生きた羊や山羊を店の前の電線用の柱につないで売る場合も見られる。酒を扱っている売店はあまりない。木曜日は酒の販売を禁止する定期日ともなっている。コカ・コーラなどの輸入品も見られるが、オレンジジュース、リンゴジュースなどはモンゴル製のものが多く、ミネラル・ウォーターもほとんどモンゴル製である。日本製品は珍しいが、「キットカット」チョコレートは、ほとんどの店に置いてある。

市場の真ん中にたくさんのコンテナが並んでおり、毛、皮、米、小麦粉などの倉庫に使われている。またいくつかのコンテナは小売店に用いられている。コンテナのそばに大きな木があり、その影に個人レンタカーが集まって客をまつ。木の近くには小売店があり、その前に掲示板がある。掲示板に馬肉の売買、ホブトとウランバートルへ行く客あるいは車の募集、労働者の募集など様々な情報が掲載されている。

ソムの中心街に幼稚園が一つある。そのほか、11年制の基本教育学校は二つあり、それぞれ中心街と北街に位置する。これらは小学校から高校まで一貫制で、1年生から5年生、6年生から11年生に二分され、前者をバガ・アング、後者をイヘ・アング、という。両者は小クラスと大クラスを意味する。授業は基本的に午前8時から午後13時まで行われるが、学校の状態によって、大クラスと小クラスの授業は、午前と午後に分かれて行われることもある。

中心街では、たびたび小牛を連れた母牛や、数頭の山羊と羊あるいは母豚と仔豚の「散歩」が見受けられる(写真1～2)。雑貨屋と食堂を経営するドルギルという女性によれば、ここでは商人や勤め人たちは、ほとんど自分の家畜の群れを持つ。そして、家畜の大多数を親戚や知人に頼んで牧草地に預かってもらって、手元に少数の家畜を置いて、日常生活用の肉や乳を確保するという。彼女の家は30頭ぐらいの羊と山羊を手元におき、食堂の肉を提供するほか、肉が少ない春や夏の時期に店のカウンターに羊や山羊の肉をおいて売る場合もある。彼女の夫は町の周辺で家畜を放牧して、夕方、家畜の群れを追って中心街を通って帰ってくる。



写真1 町を歩く牛たち



写真2 町を歩く豚

バダマラは、昔、歴史の先生だった。夫婦二人とも定年してから家で数頭の牛を飼っている。彼はゲルに住み、その周りに木を立てて庭をつくった。彼は妻を手伝って朝夕2回、牛の乳を搾り、毎日ミルク・ティーをはじめ、乳製品に満ち溢れた生活だと喜んでいる。

犬は町のあちこちをたくさん走りまわっている。夕陽に染まった町の一隅に何かの食べ物に集まる犬たちは十数頭もおり、ヨーロッパ人の旅行記に描かれたウルガ（現在のウランバートル）の犬たちの情景を思い起こさせる。これは「犬の氾濫」と言われており、政府に宣伝された犬消滅運動のとき、犬を殺すことを拒否した人々が、余儀なく自分の犬を捨て子にした結果だそうである。

こうして、川上から川下へ土れんがの一階建ての家とゲルの混在した住宅が広がっている。一軒で土れんがの家とゲルの両方を用いるものもあり、こうした住まいは木の板を並べて作った庭で囲まれ、所有者の使用空間を示している。ここに住んでいる人たちはソムの役所や銀行や学校の職員あるいは定年した人たち、および子どもを頼ってきた年寄りのほか、学校に通うため、父母の元を離れた牧民の子ども、学生の面倒を見るお爺さんやお婆さんが住んでいる。ブルガン川から分かれている細い流れは、住宅の間を通り、住民は流れのそばにプラスチックの容器を置き、洗濯用の水をためて置く。午後になると、ためた水は日光に当たって温かくなり、主婦たちや放課後の学生たちが洗濯をする。細い流れの水量は非常に少なく、切れたりする場合もあるが、住民の飲用水は井戸水を使っている。

また、川下の西岸の芝生にゲルが散在する。この土地はラガル (layar) と呼ばれる避暑地にあたるものである。この地は町の中心部より、バイクで5分ほどのところにある。勤め人が休暇をここで過ごすことが多い。とくに、町の人たちは手元の数頭の家畜をつれて、この地にゲルを張って時季を過ごす。こうした行為を「アガラ・ド・ガルナ」という。これは「空気に当たる」という意味である。ほとんどの家は牛を飼い、朝夕、乳を搾り、毎日のミルク・ティーを欠かさない。夏から秋の間、営地を移す牧民もここで一休みしてから行くことが多い。

ブヤンダライの一家はラガルにゲルを張っている。彼は学校の先生を勤めあげて定年した。彼の妻は幼稚園の仕事を定年してから、町で雑貨屋を営んでいる。ラガルで彼のゲルは川の流れから10mの距離にあり、この住居から遠くないところに買ったばかりの空き地がある。この空き地のそばに、彼の息子の一家も土地を買ってあり、それぞれ鉄線で仕切りをつけて囲んである。彼らの空き地はまだ利用目的が決まっていない。この土地の一端に土れんがの家もある。家の前に枯れ木などで作った畜舎があり、そのすぐそばに地下小屋がある。地下小屋は冬の激しい寒さや雪に覆われたとき、家畜を入れる予備の場所とされている。このあたりに土れんがの家はいくつかあり、その間に共同使用の井戸もある。井戸のそばに切れて半分になったゴム製のタイヤがおいてあり、伸ばすと3mぐらいの長さであり、家畜用の水槽に用いるそうである（写真3～4）。



写真3 共同利用の井戸



写真4 家畜用水槽

畜舎の中にザグという枯れ木の燃料の堆積が積まれて、その上にびしょびしょに濡れた牛糞を満遍なく塗りつけ、乾かしている。ブヤンダライによれば、これは冬を過ごすための燃料で、最近、泥棒に盗まれたりすることが発生しているため、妻が牛糞でこのようにしておいたという。このような個人所有のため、囲まれた土地はほかにもたくさんあり、そこでジャガイモや人参を栽培する人もいる。ジャガイモの畑は泥棒に掘られた跡があったりする。荒らされた畑に卵ぐらい大きさのジャガイモが見える。ブヤンダライと妻は泥棒の行為を指摘し、昔の人の人格を称えて、現代人の教育を論議する。

川の右岸に沿って上流へ向かうと、ブリン・ハイラハン山の西麓に果樹園がある。果樹園はブリン・ハイラハン山に連なる山々に囲まれた溪谷のような場所にあり、オープンになっている南側を鉄線で保護し、大門を設置してある。この大門のすぐ近くに道路がとおり、道はモンゴルと中国の国境に達する。

この果樹園はバーストの一家によって経営されている。果樹園のなかにワリngoなどのリンゴ類が主に栽培され、モンゴル国内、特に西部各地に果物を提供している。この一家は1997年からこの土地で果樹園を経営し、そのほか麦畑も耕して小麦粉を自給自足しているという。果樹園や畑の仕事に20人ぐらい雇い、バーストの二人の息子が彼らの管理や送り迎えに当たっている、嫁たちは町で雑貨屋を経営して果物を売っている。バーストの二番目の娘は夏になると、ウランバートルから実家に戻り、果樹園の仕事を手伝いながら、母と一緒に果物の缶詰を試作している。バーストは各担当者に仕事の分担を指示してから、一日中果樹園を歩き回り、仕事の進行を見守る。バースト一家は羊、山羊、牛、馬も飼い、小型家畜（羊と山羊）は親戚に頼んで面倒を見てもらい、大型家畜（牛、馬）は家の近くにおき、乳を搾ったり、乗ったりしているという。

ブルガン・ソムでは、自発的に牧草地を鉄線で囲うことも見受けられる。タリヤ（男性、70歳）という人の牧草地はブリン・ハイラハン山の北麓に位置する。この牧草地はタリヤの先祖代々が利用してきたと言われている。タリヤの話によれば、この土地を鉄線で囲ったきっかけは、カザフ人との牧草地の紛争があったからだという。昔からこのあたりにカザフ人の牧草地はなかったが、最近、彼らは大いにこの地に遊牧圏を広げてきて、牧草地が足りない、彼はいう。この鉄線の囲いは最近つくったもので、このお陰で今年、家畜の草は十分に足りたばかりか、この土地で刈った草はトラック17台分にもなり、冬季の家畜の餌に10台分確保し、残りの草を売れば金になるという。タリヤの息子たちはウランバートルやソムの中心地で仕事を持っており、一人の娘は結婚して、夫と一緒に近くで牧畜業を続けている。病気で妻を亡くしたタリヤは一人でこの牧草地に住み、忙しいときに娘の一家を呼んで手伝ってもらう。タリヤの住んでいるところは、ソムの中心地から車

で15分かかるところにあり、彼の牧草地は布林・ハイラハン山麓に広がっている。

ブルガン・ソムの中心地で、このようなありようで人々は商業や農業といった様々な生業と牧畜業を組み合わせ、生活を営んでいる。この地では、20世紀の初めごろすでに商業と農業があったと伝えられている。ノースタイ（男性、88歳）は20代ころ（1940年代）このあたりで商売の経験をした。当時、秋ごろ布林・ハイラハン山あたりのブルガン川畔に、ホプトやフフホトのマイハン（売買するテント）というキャラバンが集まって、家畜、麦、布、たん茶などの貿易を行っていたと、彼は語っている。また、彼は漢人に習って農業もしていたし、ベーリン・トルグートは以前から農業に慣れていたという。しかし、ソ連時代にモンゴル国はソ連東欧から大量の食糧を輸入したため、現地のモンゴル人は農業をやめてしまったと言われている。最近になって農業を復活させようという動きが始まっている。

電気と通信情報の問題は現代生活に不便をもたらしている。町では行政機関を中心に水力発電が使われている。電気はウエンチ・ソム内のウエンチ川の水力発電所によって、提供されているが、不調が1ヶ月のうち半分以上も続き、ソムの役所などの業務に影響を与えている。インターネットの一般利用はともかく、銀行での送金情報の確認さえできないことは稀でない。町の一般家庭では、水力発電の整備は整っているが、ほとんど利用できず、各家庭に太陽電池がつけられている。太陽発電の装置は、12ワットのものが一般的に使われ、部屋の照明とテレビおよび携帯電話の充電程度の必要を満たしている。携帯電話は町から田舎まで、大人から高校生まで普及し、通信の主要な手段となっている。

(2) 田舎の生活実情

アラグ・トロゴイ・バグはバンギン・トルグートの牧草地である。ダシワンジル山にオポーを立てたバンギン・トルグートのヌトックは昔からここに広がっている。「ヌトック」という語は一般的に「里」を意味し、広義には、遊牧して移動する自然環境を指すが、ブルガン・ソムのトルグート人の語りでは、「ヌトック」という語は主に次のような意味で使われる。すなわち、ノースタイという人は経験談のなかで、20世紀のはじめの紛争時代にバンギン・クレーと一緒に、30戸のヌトックがダシワンジル山に戻ったという。彼は自分をはじめとする牧民同士のことを「読み書きのできないハラングイ・ヌトック（無知な人間たち）」といい、有能のノヤン（殿）のお陰でヌトックの物事が秩序よく行われたと語っている。これらの表現から見ると「ヌトック」は明らかに「人間」という意味を示している。そのほかのベーリン・トルグート人もこのような言い方をしている。つまり、現地では「ヌトック」という語に「人間」とその居場所が集約して表現されている。したがって、「ヌトック」に「人間」と「自然」が集約されていると理解できよう。

ノースタイによれば、ブルガン川流域にバンギン・クレーのほか、ベーリン・クレーとホシュト・クレーがあった。彼の子どものころ、カザフ人と牧草地争いがあったため、バンギン・クレーは現在の中国新疆自治区内に移って、後にダシワンジル山あたりへ戻ったという。その際、当然ながらヌトックはクレーと一緒に移動していたそうである。この牧草地は昔からバンギン・トルグートの里である。

また、ノースタイはバンギン・トルグートの殿の指導を「アハラフ (aqalaqu)」という動詞で表現している。この語は「先頭に立つ」という意味であり、「支配」の意を表さない。

というのは、「支配」には、殿とそのヌトックは「統治する」側と「統治を受ける」側という対立関係にあることが示されるので、殿が頂点に立つことになる。「アハラフ」という動詞は「全員で目的に向かって物事を行う際、リーダーが先頭に立って進む」という意味で行為が同一の方向性を持ち、殿が最高位でなく、その先に未知な領域があることが考えられる。したがって、バンギン・トルグートはバン（王）に先導されたトルグート人たちの集まりであって、バン（王）とクレーが廃棄されてもこの所属意識はずっとヌトックをまとめている。

バンギン・トルグート・ヌトックの分布のなかで、最も多く集まった地方はヤマントというところである。ヤマントはソムの中心地より川下に位置し、冬営地としてここに15戸の牧民が住んでいる。

これらのアイル（戸）は夏、秋にそれぞれ良い水と草を求めて各自移動する。夏に、ブルガン川畔は酷暑になり、蜂が発生して馬をはじめ家畜が耐えられないため、営地を高山に移す。遊牧の移動は80～120kmの距離にある。8月末から9月の初めにかけて、牧民たちは徐々に夏営地から秋営地に移ってくる。秋営地は冬営地の近く、川岸にある。ここで、ヤマント地方のガタラガンネ・アマというところに、秋営地を設けたムンヘバートル（男性、40代）の家およびその近隣の生活に焦点を当てて、田舎の暮らしを取り上げたい。

ムンヘバートルの妻はホロロといい、夫婦二人とも40代で三人の娘と一人の息子を持つ。ムンヘバートルのゲルはブルガン川岸にたてられ15歩で、川の水を汲むことができる場所にある。ほとんどの牧民はこのように水の近くに住んでいる。そして、2、3戸あるいは3、4戸が一緒に集まって暮らしている。このようなゲルの集団はブルガン川沿いに絶えず続き、互いに500mぐらいの距離をもつ。そのなかの一つはムンヘバートルらの集団であり、彼の近所にノースタイ、ツェレンジャブ、ムンヘラのゲルが建てられている。この4戸のゲルは前後2列になり、前列に3戸のゲルが並列し、これに20mぐらいをあけてムンヘバートルのゲルが後列に並ぶ。

ノースタイは妻をなくし、子どもを持たない独身の老人であり、大きくなったツェレンジャブを養子にもらった。ノースタイは所有の家畜をツェレンジャブに分け与えて、独立した家を持たせ、自分はそばに住んで面倒を見てもらっている。ツェレンジャブ夫婦には、3歳の養女がいる。また、ノースタイのそばにツェレンジャブの妻の姪にあたる少女が日常生活の面倒を見ている。彼女はシャラオキンと呼ばれ、小学校は中退した。

ムンヘバートルはツェレンジャブと同じように養父に育てられた。彼の養父はノースタイの実兄であって何年前に亡くなった。ムンヘは独身の老女で、彼らと同様にヤマントの15戸の成員である。彼女の息子の一家はソムの中心地に住んでおり、彼女一人で数頭の牛を飼ってここで暮らしている。ムンヘバートルらの集団の前に、3人の兄弟が集住している。この集団の後ろに集住した親子が営地を設けている。

秋営地で、川沿いに木が生え、流れに従って長い緑の線をなし、遠くまで続く。川畔に平原が広がり、そこに草が生えて、畑の作物のようにあたり一面に見えてくる。ここに主に葦が生えており、家畜の冬の餌になる。戸々の葦を刈る場所はほとんど習慣的に決まっており、毎回、自分の草刈場に近いところに、ゲルを建て家畜の餌を集める（写真5～6）。ムンヘバートルの妻のホロロは自分や近隣の草刈場を指さしてくれた。秋は家畜の冬の餌を用意する時期であり、牧民にとって猫の手も借りるほど忙しい。近隣や親戚の人たちが

協力し合って草刈をしてから、集めた草を冬営地に運んで保存しておく作業が行われる。この仕事は大体10日間続く。ムンヘバートルたちは草刈りを終えて運ぶ段階で作業を進めていた。ソムの中心からムンヘバートルの兄と親戚の子どもが手伝いに来ている。ムンヘバートルの甥はトラックを運転して草を運ぶことになっている。



写真5 草刈りをした後の平地



写真6 家畜の餌を運ぶトラック

ムンヘバートルらは合計で20数匹の馬をもつが、特に放牧しない。使用の馬を捕まえるとき一度馬群を集めるほかは、家の近くの牧草地で好きにさせる(写真7)。牛は各戸に5、6~10数頭有り、放っておいても牧草地を歩き来する。戸々は毎日朝夕に2回牛の乳を搾る。ラクダはこの地に適した重要な交通手段であるため、各戸に2、3頭いる。ムンヘバートルたちは夏営地から移ってきてから、ラクダを牧草地に放している。ムンヘバートルとツェレンジャブとノースタイの家畜は一緒になっている。特に羊と山羊の群れは合わせて300頭程度で、ムンヘバートルとツェレンジャブの家は交替で放牧している(写真8)。この秋営地に畜舎はなく、家畜たちは牧草地から帰ったらゲルの集団の間にある空き地に適当にいる。冬の餌を集める時期、働き手が足らず、シャラオキンはずっと一人で馬に乗って家畜の当番に行っている。シャラオキンは朝9時ごろ家畜を牧草地に出して放牧する。12時ごろ、一度、家畜を家に戻し水を与えて休ませる。そうして午後3時ごろ再び家畜を牧草地に放牧して夕方6時ごろ帰ってくる。



写真7 馬を捕まえている



写真8 3つの家の家畜



写真9 夕方、牛の乳を搾る少女

8月末の時期、学校へ行く子どもたちは、そろそろ新学期を迎え、牧畜地を離れなければならないため、ムンヘバートルの上の二人の娘は、中心地に戻っているが、3番目の娘は後から行くことにして草刈の忙しさのなかで、2年生の弟の面倒を見ながら家事を担っている。彼女はお母さんの代わりに牛の乳を搾り、柴と牛糞を集めて、洗濯をし、小麦粉で菓子を作っておく。菓子は毎日一家の朝食と昼食になるので、一回にたくさん作ってお

くと、数日間もつ。草を運ぶ人たちもまた、このような菓子とミルク・ティーで一日凌ぎ、夕飯を待つ。

牧民の一日は朝早くから始まる。明け方、羊や山羊の群れが自ら牧草を探して営地を出る。そのとき、睡眠中のホロロは家畜の足音で目が覚めて、すぐにゲルを出て家畜を営地に追い戻しながら野原から牛糞と柴を拾ってくる。牧民は寝ながらも、常に家畜の動きに耳を澄ましていなければならないと、ムンヘバートルはいう。なぜならば、家畜の群れを狼が襲う可能性もあれば、家畜が自ら移動して営地を離れる可能性もあるからだという。ホロロが帰ってくるころ、夫は草の運搬に出かける。ホロロは夫と仲間たちの朝食を用意するため、川の水を汲んできて茶を沸かす準備をする。拾ってきた牛糞と柴を炉に入れて火を焚き、上に釜をかけて川の水で湯を沸かし、湯に塩とたん茶を入れて茶をたててから、なかに昨夕、搾った牛乳をバケツの半分まで注いで再び沸かす。ホロロはミルク・ティーをまず扉から外へ撒いて祈りをする。そして、彼女はミルク・ティーの一部は家で朝食に飲むようにし、一部は菓子と一緒に夫と仲間たちに持っていく。同じようなものを隣の家も交替で昼食に用意して仕事場に届ける。

女性と子どもと年寄りには家に残るが、牧民は絶え間なく営地を訪れる。行方不明の家畜を探す人もいれば中心地から帰りに通りかかる人もいる。ともかく、夏営地からブルガン川に移ってくる家が増えるにつれ、人々の往来は絶えない。そこで人々は情報を交換し、夏営地や家畜の状況、越冬準備の進行状況などを話し合う。家を訪れる人にまず熱いミルク・ティーを出すことにホロロは大忙しである。これは礼儀正しい接客であろう。朝のミルク・ティーを作る手順とまったく同じ作業をずっと繰り返す。家に水をためる大きな容器もなければ魔法瓶も用意していない。毎度、立てたミルク・ティーを大きなやかんに入れる。そして、毎度最初一杯あるいは少量を「デージ」としてとっておく。「デージ」は「家の福」と理解され、亭主がいるときは、彼に飲ませるのである。それから来客にミルク・ティーを差し出し、バター、チーズ、菓子、砂糖など家にあるものを客の前に並べておいて勧める。冷たい茶は好ましくない。そのため、やかんに入れたミルク・ティーは、冷めないうちにどんどん勧めて飲み干す。飲みきれず冷めたミルク・ティーは捨てられる。次の客が来ると、改めてミルク・ティーをたてる。魔法瓶に入れたミルク・ティーはおいしくないという。たびたびミルク・ティーをたてるため、枯れた木の枝や乾いた牛糞を仕事の傍ら、家のまわりで拾い集める。水もそのたび川から汲んで利用する。

ノースタイは88歳の高齢でありながら、毎日斧で枯れ木を切って燃料にする。こうして集めた柴は秋営地で毎日使うものであって、冬の燃料は大量に購入しなければならない。ノースタイはいつも体を暖かくし、夏冬に関係なくトーカーという、フェルトと皮の手作りブーツを履いている。ノースタイは、冬に備えて、1頭の3歳の牛を代金にトラック一台分のザグを運んでもらうよう、親戚に頼んである。ザグはゴビ砂漠地帯に生える植物である。人々は冬の燃料のため放牧の傍ら、ザグを拾い集める。ザグの燃焼熱は高く、燃えさが長持ちするので、特に冬の夜を耐えるのに適切な燃料である。

普段、夕飯は各家できちんとした料理を出す。共同作業のとき誰かの家に集まると、肉料理をたっぷり作る。ツェレンジャブの家で1頭の山羊を殺し、妻のウルトナストは内臓を処理してソーセージ、血の腸詰めなどをつくり、夕飯に出した。内臓料理を食べている間、肉汁に手打ちうどんを入れてグリルタイ・シヨル（スープ麺）を出す。こうして空

腹と疲労を癒して寝る。今度はムンヘバートルの家で肉を提供することになった。ホロロは夫を仕事に送ってから川岸の木の下で1頭の山羊を殺して処理した。営地で頼める男性がいないため自分でやるしかない、彼女という。彼女はこのことを内緒にしてくれと頼む。というのは、現地では、習慣的に女性は家畜を殺すことが許されないからだ、彼女は説明する。

このように、ムンヘバートルらは秋営地で2ヶ月滞在し、冬の準備を整えながら降雪を待つ。なぜなら、11月ごろムンヘバートルの一家は、小型家畜を預かって山へ行くのに、水がないため雪に頼るしかないからである。ほかの家は冬営地に移り大型家畜の面倒を見る。家畜が少ない家は2、3戸まとめて交替して放牧を担当するが、家畜が多い家は単独に放牧し、多忙の時期は周囲に助けを求める。

一見すると、牧民たちは自由な結合をして牧畜業を営んでいるようだが、その裏に彼らの精神を集中させる、何らかの力があるように思われる。この力は家庭の生活、営地での助け合い、そして社会的な帰属意識に一貫して見られる。言い換えれば、朝夕の食事や来客のもてなし茶の「デージ」を亭主に差し上げることは、絶対的に守られている。そして、亭主が不在の場合、デージを男の子に与えることがしきたりである。また、生活上、結合した集団のメンバーは、ほとんど互いに兄弟や従兄妹や親子といった親縁関係にある。さらに、この地域のメンバーはバンギン・トルグートに所属し、ダシワンジル山は彼らの精神的な紐帯の象徴になっている。つまり、ダシワンジル山をシンボルにもつ、バンギン・トルグートのヌトックであることが、彼らの心をつなげる。モンゴルの諺にあるように、「デベル・ド・ザハタイ、フン・ド・アハタイ（服に襟があり、人間にリーダーがある）」といった秩序は彼らのなかに暗黙に維持されている。

3. トルグート集団のアルタイ・デレヘイ⁴⁾ 崇拜

ブルガン川流域は山々に囲まれて最も平和な場所で敵にさらされたことのない、いわゆる桃源郷として現地の人たちに敬われている。現地の人々によればブルガン・ソムの中心地を囲む山々の中に九つの赤い山があり、土地の臍とも敬畏されるブリン・ハイラハン山は中央に聳え立つ。ブリン・ハイラハン山は主にベーリン・トルグートに崇拜される聖地であり、昔このあたりにベーリン・クレーがあった。この山はそれほど大きくなく、ラクダの2コブのような形をして東西方向に横たわっている。山麓から山頂まで10分かかる。ブリン・ハイラハン山を一周すると、約1時間である。この山の頂上に女性は足を踏み入れることを禁じられている。ブリン・ハイラハン山頂と麓にオボーが1個ずつある（写真10～11）。

⁴⁾ デレヘイとは「世界」の意味。「アルタイ・デレヘイ」は「アルタイの世界」の意味。



写真10 フリン・ハイラハン山頂のオボー



写真11 山麓のオボーとエージ・ハダ

バーストによれば、昔、布林・ハイラハン山のオボー祭祀を行うと、その日に雨が降ったといい、また、古老の伝えでは、1921年の革命以前のある年、布林・ハイラハン山を祭ってもなかなか雨が降らなかった。それはこの土地のエゼン（主）が祭祀を受け入れないからだと言われ、そのため、17頭のラクダに乗せた荷駄を供え物にしてチベットのグンテンジャンビヤンという生き仏に「サン」⁵⁾をつくってもらった。それから、再び布林・ハイラハンのオボーを祭ると、雨が降るようになったという。1990年代、バーストはシーラブという僧侶と力を合わせて、トラック一台分の木を布林・ハイラハン山頂に運んで、改めてオボーを立てたという（これ以前、モンゴル国では、宗教弾圧のため民俗信仰は禁じられていた）。山麓のオボーもまた、彼が真ん中にトラック一台分の石を入れて、周囲をポプラで囲んで新しくつくった。5～6月の間の吉日を選んで、オボー祭祀を行うという。だが、近年土地が枯れ果てて、オボー祭祀の日も雨が降らず、砂埃が舞い上がる日も稀でないとバーストは心配している。彼は、自然の資源の規則正しい利用が必要で、人間の行動には限界があるはずなのに、最近では、先祖から受け継がれてきたこの教えが、ほとんど通用しなくなり、その結果、燃料のザグが尽き、砂嵐も頻繁になったと憂い顔だった。このため、去年からバーストは中国青海省にある、ゴンブン寺の生き仏のもとに伺候して、オボー祭祀を再開したいと考えている。ところで、バーストはゴンブン寺の生き仏にヌトックのサブダグ（生活空間の主）の名前を尋ねられて驚いたという。なぜなら、彼は年配者たちがヌトックのサブダグを口にするのをしばしば聞き、サブダグをエゼン（主）と理解するのは一般的なことだが、これに名前があるとは初耳で、ブルガン・ソムで調べて、ある僧侶にヌトックのサブダグおよびその家族の名前を教えてもらったという。サブダグはトドグ・バラバルと、その妻はハンダマと、彼らの息子はショセレンと、いう名前である。

バーストはこういう。我々はテード・テンゲリを崇拜し、聖なる山を祭る。崇拜する際、サンを捧げ（敬意を表す松科の植物を燃やす）、帽子を脱いで「チョイド・ハイラハン」と言ってお馳走を供えるという。脱帽は相手を頭上に頂くことを意味し、「チョイド・ハイラハン」は「祭祀のご馳走を受け入れてください」という意味だと、彼は説明を加えた。

山麓のオボーの近くに絹で纏われた岩壁があり、女性に崇拜されると伝えられている。岩壁を拜んでいたエレデニチメグと言う20代での女性に聞くと、この岩壁はエージ・ハダ（母の岩壁）と言ひ、女性を見守る聖なる存在としてブルガン・ソムの人々に信仰されているという。彼女はザハチン人で、隣のソムからブルガン・ソムに嫁に来たようだ。今

⁵⁾ 寺院などである特定の信仰対象（仏）に捧げた多くの供え物で、読経で浄められたものをいう。

年の春、彼女は生活が不調で姑に「エージ・ハダを拝みなさい。いつも見守ってくれるよ」と教えてもらって、この岩壁をはじめて拝んだ。そうすると、何ヵ月後に願いが叶って姑の話の深く信じ、暇があればエージ・ハダを拝んでいるという。彼女の行為からみると、山麓のオボーとエージ・ハダは直接関係しないようである。バーストの言うところでは、このエージ・ハダはアルタイ・ソムのあるウドガン（巫女）によって認定され、信仰が広まったという。

このオボーのもう一方の、たくさんの樹木が生えているなかに、ハダグという敬意を表す絹類をかけて祭られた一本の木があった。この木のそばを国境につながる有料道路が通っている。有料道路監督者のバトスへ（男性、53歳）によれば、この一本の木はアーブ・モド（父の木）と言われ、主に男の人によって祭られている。とくに、遠くに出かける人はこの木にハダグを捧げて無事を祈ってからいくという。彼が8歳のときから、この木はずっと祭られていて、すでに45年も経っているそうである。

バンギン・トルゲートはダシワンジル山を崇拝してオボーを祭る。ダシワンジル山にも頂上と麓にそれぞれ一つのオボーがある。ヤマント地方の人々によればオボー祭祀の際、ダシワンジル山頂に僧侶と一緒に何人かの男の人が登り、オボーに供え物を捧げてくる。オボー祭祀に集まった人たちは、山麓にあるオボーに捧げ物をして祈りを捧げるという。ここもやはり女性は参詣を控える。オボー祭祀の最後にナーダムが行われる。

ホシュト人はバヤン・ゴルの河口にあるツァツン・オボーを祭祀している。ホブグサイリン・トルゲートは自分のオボーを持っていない。彼らは現在ホブグサイリの故郷にいる、シャルバイという生き仏に聖なる山を指定してもらい、これからオボーの聖地をつくることを考えている。とは言え、これまでホブグサイリン・トルゲートが毎日、アルタイ・サブダグ・シブダグへの祈りを怠ることなく続けていることは、ウニル、ブーベラの敬虔な祈りから分かる。ウニル①は祈りの言葉にフリン・ハイラハンを取り挙げて、祈りを捧げている。

木あるいは石積みを利用して祈願を伝えることは、旧暦の正月にも行われる。正月の一日にどの家でも家の前に石積みをして、アルタイ・デレケイ（デレケイは「世界」や「大地」を意味する）を祭ると言われている。石積みの代わりに樹木や雪を積んで、正月の祭祀をすることもよく見られると、ブヤンダライは言う。バーストの住まいの前に一本の大きな木にハダグを縛ってある。バーストの妻のツェンデスルンは「正月一日に、家族全員でこの木にハダグをかけ、茶をはじめ、ご馳走を捧げてアルタイ・デレケイを拝むのだ」と説明している（写真12）。バーストは「正月の礼拝」を「自然と交流している」と言い、「ご馳走を捧げること」を「デージ・オルグネ（初物を捧げる）」と表現し、「エゼン・サブダグが空気を通して、捧げ物を受けて喜ぶのだ」という理解を語っている。ヤマント地方の15戸のバンギン・トルゲートは正月の一つのオボーに集まって、アルタイを祭ると言われている（写真13）。ホロロとムンへによれば、正月一日に各戸の亭主は夜が明けるとや否や、子どもをつれて茶、ミルク、酒、菓子、ハダグなどを持って日の出と争うようにオボーに行く。集まった人々はオボーの上にアラツァを燃やして、茶とミルクと酒を撒いてアルタイに祈る。それから、オボーのそばに座って新年の茶を飲み、互いに新年の挨拶を交わす。



写真12 バーストの家の前にある祈りの木



写真13 正月、ヤマントのオポー

そして、現地の人々は日常の祈りを欠かさない。特に主婦は常に祈りの言葉を口にしていく。ホブグサイル・トルグートのウニル^①に言わせると、朝夕、アルタイを拜んで、「わがアルタイ・タブン・ボグダ、わがバイン・ブリン・ハイラハンよ、遠くや近くの家族を見守ってください」という祈りの言葉を唱えているという。ドマの祈り言葉にブルガン川を「ブルガン・エージ（母）」という。バーストはブリン・ハイラハン山を「ブールル（蒼き）・エージ」と呼んで祈る。

バーストの妻はホシュト人だが、彼女は毎朝、牛の乳を搾ってから、四方の空中に撒いてアルタイ・デレケイに祈りをしている（写真14）。四方に乳を撒くとき、まず太陽が昇る東方に向いて捧げる。それから、時計まわりに回っていく。太陽が昇る方位は現地で「南」と認識されている。したがって、この地方での民俗的な方位認識は、通常認識と逆時計回りの方向で90度ずれると思われる。これと同じように、バンギン・トルグートのヤマント地方でホロロも毎朝、茶を四方に捧げる（写真15）。



写真14 朝、太陽に向かって乳を捧げる



写真15 ホロロの捧げる茶

また、現地では、家のなかに仏壇の代わりに先祖（祖父母や亡き両親）や亡くなった人の写真を置いて祭ることが多く見られる（写真16～17）。ヤマント地方のホロロは写真を額縁に入れることを恐れ、亡くなった人にしかしないことと認識している。そして、彼女は自分の亡き両親のことを「ヌーゲド・ヤブサン（引っ越して行った）」と表現している。ホロロの表現から考えると、現地で死者は死後の世界において生前と同じ姿で生活するように思われる。この考え方は口承文芸の『アルタイ讃歌』に登場するハーンが若帰りをし、山の頂上に旅して、聖なるアルタイン・エゼンに供犠することを想起させる。両者を考え合わせるなら、上記で述べた死者は人間の願いを聖なる存在に届ける力を持つと理解される。

ノースタイはゲルの壁に一枚の仏の絵をかけている。また、ゲルの奥のもの入れの上に亡くなった妻の写真をおいて、毎晩それに水とアラツァ⁶⁾を捧げて祈祷する（写真16）。

⁶⁾ 松科の植物。

彼は壁にかけている仏の絵に対して、知人にもらったもので役に立つかどうか分からないと、疑わしげにいう。ノースタイによれば昔、バンギンとベーリンとホシュトは、それぞれ自らのクレーをもっていた。彼はクレーでマンジ（小僧）になって勉強したことがあるという。クレーはいくつかのゲルで構成された寺院で、その周りで商売が行われたりして、いわゆる現在のソムの中心地の役割を果たしたそうである。牧民たちはクレーで仏を拝んだり、僧侶に病気を見てもらって、投薬を受けたりする。クレーは常にノヤンの動きとともに移動した。後に、ノヤンはいなくなって、クレーも廃棄され、バンギン・クレーの金の仏像はウランバートルのガンダン寺に移動させられたと言われている。ノースタイは若いころ、生活の大部分を狩に頼って、年中家畜を追いかけて、アルタイの山を走り回り、たまに川原にあるクレーに来ていたという。アルタイの自然の幸に自分たちは育てられたと、ノースタイは深い感謝を述べている。



写真16 ノースタイの亡くなった妻



写真17 家の主の先祖の写真

現在、ソムの中心地でモンゴル人に崇拝される仏教寺院と、カザフ人のモスクがそれぞれ一つずつある。だが、寺院に金の仏像がないことを現地の人々は口々に気にする。そして、彼らはウランバートルのガンダン寺にある金の仏像が、いつか地元の寺院に帰ってくることを強く望んでいる。

生活の実情を踏まえて考えるなら、現地で伝統的な信仰習慣が維持されている一方、様々な民間信仰が同時に織り込まれている。起源が異なるかのような、いくつかの信仰が彼らの生活のなかで矛盾なく共存している。

オボー祭祀、正月の祈りと日常の祈祷は、現地の生活に深い根を下ろした信仰形態に現れている。これらの行為のなかに、願いを込める崇拝対象は、人々の祈りの言葉によく登場するアルタイ・デレケイ、あるいはデート・テンゲリといった存在である。だが、オボー祭祀にせよ、正月の祈りにせよ、日常の祈祷にせよ、いずれも崇拝対象の存在は神像をもっていない。その代わりに、自然のなかにある特異な地形や方位は聖なる存在を象徴し、人間はそれを通して、自然界と精神的なつながりをもつ。オボーはヌトックに敬われる山に、正月の祈りは家の前の石積か木に、日常の祈りは日の出を尊崇して、四方を敬う。現地のトルグート・ヌトックにとって、祈りを行う聖なる場所は崇拝の対象でなく、そこは神聖な存在と接触する場である。人間の行動が限度を超えたりするとその場が穢れて、崇拝の存在は人間の祭祀を受けないという理解はバーストの語りから伺える。こうした場の媒介概念があって、人間界を超えた神聖な領域は無限に存在する。そのため人間の崇拝対象は神像を持たない。場合によってアルタイの自然そのものは、神聖な領域かつ聖なる存在と考えられ、ヌトック（里）として人間を養う。バンギン、ベーリン、ホブグサイリンといっ

た諸集団はそれぞれ自らのシンボルとしての聖山をつくったりしても、その祈り言葉に常にアルタイ・デレケイすなわち彼らの住んでいるアルタイの自然が取り挙げられる。

こうした媒介概念があったため、エージ・ハダ、アープ・モドの信仰は、自然のなかの一要素である岩壁と樹木が媒介の場所になって、オボーと同じような役割を果たしているから、矛盾しないと考えられる。寺院および仏像の存在は少なくとも現在の生活のなかでそれほど大きな役割を持たないようである。仏画に対するノースタイの疑問からも伺えるように、仏像は彼らの生活に直接関わる実感のない存在である。それは金の仏像を失ったことも要因だが、アルタイの自然のヌトックをより敬虔に信仰することが、宗教上、高い位置を占めているからであろうと考えられる。

アルタイ・デレヘイと交流する場所としてオボーが挙げられるが、この聖なる存在の住処は明らかでない。人間は供犠をすることによって、アルタイ・デレヘイに願いを込め、こうした付き合いに3つの方法が考えられる。一つは、日常や祭祀などで常に乳、茶を散布する方法が挙げられる。もう一つは、オボーの上に肉や乳製品を供えることである（乳製品を供えることはほかの地域でも同様）。最後に、肉やアラツァなどを焼いて煙を出すことであり、アルタイ・デレヘイの居場所は上空にあると推測できる。これはまたオボー祭祀をモンゴル系諸集団の民間で「デーレ・モウグネ（上に叩頭する）」と表現することに一致する。つまり、アルタイ・デレヘイは無限なる高みに存在する。

このように、現地の人々の語りおよび信仰行為に見られる崇拜対象の性格を絞ってみると、特定な像をもたず空気のように博大に存在することはアルタイ・デレヘイの根本的な性質と考えられる。女性像は再生のシンボルに用いられることは一般的であると認めるならば、ムンヘ・ハイラハン・ソムのウリヤンハイ人の寺でアルタイ・エゼンを大黒天の仏像で表すことに鑑みると、アルタイ・エゼンの本質の信仰概念を背景にもつ人々の崇拜心理によってアルタイ・デレヘイの再生力はエージ・ハダのように女性像に集約されることが可能であろう。バーストが僧侶に教えてもらったように、アルタイ・デレヘイは現地の人々に男性としても想像されることは崇拜対象の偶像に選択の余地があることを示唆する。

ブルガン・ソムでの調査を通して、アルタイ山脈に生きるトルグート人の自然環境および彼らの生活実情を目の当たりにした。彼らは、年間降水量が少なく、ほとんど氷河と地下水に頼る状況のなかで、乾燥と寒冷に耐えながら、環境に適応して生活を営んでいる。現地の人々は家畜の様子を見て、暑さと寒さおよび水と草の状態を察して営地を転々とする。アルタイ山地の険しい地形と質の高い牧草、そしてブルガン川原は彼らと家畜を養っている。

ブルガン・ソムはモンゴル国の西部に位置しながら、険しい山地に隔てられて、モンゴルおよび現代社会の影響はそれほど激しくないが、ソムの中心地で現代社会の経済競争の刺激を受けている。ソムの中心地に商店の数は溢れるほどであるが、品物はほとんど同じである。現地の住居は主にフェルトのゲルが使われるが、冬営地や中心地でゲルと固定家屋が混在している。固定家屋は、ほとんど土れんが製でコンクリートのものは極めて少ない。土地の使用目的が決まらなくても、とにかく私有地をもつという動きが見られることから、固定家屋の増加につれて定住が進み、土地の所有をだんだん意識しはじめていることが察せられる。田舎の生活は遊牧形態を維持し、営地の転換にしたがって、その場で必要を満たしている。自然被害および越冬に備えるため、余分の材料を蓄える以外、大量の

保存は考慮されていない。中心地でも田舎でも、燃料にほとんどポプラやザグをはじめとする、野原の枯れ木と牛糞を使用しているが、近年、燃料不足の問題を抱えはじめている。

自然と経済の環境を基礎にした社会環境に目を向けると、ここには、牧畜に生活の基盤をおくいくつかの民族や集団が分布している。ブルガン・ソムのモンゴル系諸集団は歴史的にカザフ人と接触しながら、遊牧地が隣り合うなかで牧草地の争い、さらに紛争まで起こした。このような異民族の接触に見られる争いは、また現在、牧草地を囲んで鉄線で柵をつくっていることに現れている。このような異民族間の衝突に比すると、モンゴル系諸集団の間に仲間意識が自然に認められる。アルタイ山脈の懐にある、ブルガン川流域は紛争の時代を逃れて、遠く身をおく里にもなって、トルグート・ヌトックをはじめとする、モンゴル系集団を守ってきた歴史をもつ。ここに集まった様々なモンゴル系集団は、互いに牧草地を争うことがなく、平和で暮らすなかで自らのアイデンティティを保っている。つまり、これらの集団は混在しながら、自らの所属意識を先祖から受け継ぎ、ヌトックのシンボルを有する。彼らの牧草地は習慣的に決まっておき、戸を単位に営地を変えて、転々と遊牧することを取っても集団の結合は維持されている。

従来、モンゴル集団の遊牧は無限な領域を転々として、たどり着いたところに聖なる場所を選定し、その土地を祭る特色をもつ。無限な空間があれば、無数の聖なる場所の選定があるはずである。したがって、集団すなわち人間の移動によって居場所が変わり、随時たどり着いた土地をヌトックと見なすことは遊牧の精神である。すなわち、遊牧において人間と自然の出会いは常に新しくかつ密接である。そのため、「ヌトック」の移動は、「牧民」の移動でもあり、「里」が変わることでもある。両方を意味することは可能であって、2の(2)で見たように「ヌトック」という語に「人間」と「自然」の意味が集約される。

ところで、アルタイ山脈のある空間で牧畜を営むモンゴル系集団が、限られた領域で四季の遊牧を繰り返しながら、オボー祭祀のような行事を同じ場所で行っても不思議はない。ブルガン・ソムのダシワンジル山、ブリン・ハイラハン山といった諸集団のオボーはこのようにして固定的なシンボルになったであろう。そこに諸集団のヌトックが集中している。

モンゴル系諸集団のアイデンティティは、ヌトックのシンボルをもって、それぞれの社会的な所属を明瞭に示している。彼らのアイデンティティは社会的な役割をもち、自然と付き合う遊牧民の世界観において、異質なものは見出せない。すなわち、ダシワンジル山やブリン・ハイラハン山といったオボーのシンボルは集団の存在を表し、ヌトックの帰属意識を高めて、モンゴルまたはその地域社会において自らの位置付けを示す。だが、シンボルの信仰概念においては、集団の独自性が見られない。集団の所属意識において、ノヤンの存在は至高の位置を示さず、先導する先に未知な領域が認められるなら、そこにアルタイの自然という神聖な存在が当てはまると考えられる。ノヤンに先導されるヌトックの崇拜行為は、象徴的な媒介所を通じてアルタイの自然と心が結ばれる。集団のヌトックはともかく、諸集団の仲間意識においても同様なことが言えよう。したがって、エージ・ハダであれ、アープ・モドであれ、ブリン・ハイラハン山であれ、ダシワンジル山であれ、ブルガン川であれ、これらはすべてヌトックの自然を構成する要素であって、人間にとって崇拜対象を象徴する神聖な物にすぎない。つまり、彼らが生活を営む「里」において象徴的な場所とされる山は、自然を司る力あるいは自然そのもののシンボルとして敬われる。このシンボルである山を通して、その背後にある存在によって人間の心がまとまる。これ

までの考察に基づけば信仰の媒介物の背後に特定な神像が見られない。まして、そこに無限な領域が広がることも可能に思われ、死者の世界もそのなかに含まれるかもしれない。したがって、現地での先祖の崇拜もまた、人間と自然との精神的なつながりを示すであろう。

引用文献

1. モンゴル語ウイグル式文字

Bürgüid

2000 «Oïrad mongyol-un teïke» Sinjïyang arad-un keblel-un qoriy-a

2. モンゴル語キリル式文字

Д.Жагдарбарам

2000 «Манхан сумын хоридугаар зуун» Хобд

Н.Намсрай

1999 «Өөлдын соёл түүхийн бичиг оршибай» Улаанбаатар

М.Ганболод

2001 «Алтайн урианхайн уламжилалт шүтэлгэ» Улаанбаатар

С.Бадамхатан

1996 «Ойрадын огсаатны зүй» 2 боть Улаанбаатар

3. 日本語

msn 天気予報によるモンゴル国ウランバートル気温と降水量情報〔平均値と観測史上の記録〕